

[原 著]

幼児の「あざむき」の感情表出の理解に関する研究

筑波大学心理学研究科：楯 誠

A study on preschooler's understanding of deceptive emotional expression

Makoto Tate

問題と目的

人は対人関係において利益を得たり、不利を避けるために自分の本当の感情を隠し、異なった感情表出を他者に向けてことが社会生活において多々存在する。この内的感情状態と外的感情表出が異なること、感情表出の制御を Saarni, Mumme & Campos(1998)は、感情偽装(emotional dissemblance)という言葉で定義している。このことは子どもにとっても同様であり、発達の見地に立った感情偽装研究は多くなされている。これまでの子どもの感情偽装の知識・概念獲得研究の多くは社会的・文化的に適應するための感情偽装、周囲の社会的環境からの要請に応じるものとしてディスプレイ・ルール(社会文化的表出規則)の獲得に焦点が当てられ、説明・解釈がなされてきた。しかしながら、感情偽装は社会的要請によってのみ生じるものではなく、対人関係においてより有利に立つため、他者を操作して自己の目的を達成するために用いられる場合もあると考えられる。例として「嘘泣き」が挙げられるだろう。援助を得るため、あるいはこれ以上の外界からの不利益を避けるため、泣くふりをし他者をあざむくものである。これは社会的な要請からは外れたものであり、場合によっては社会的に望ましくない感情偽装であるといえる。しかしながら、子どもはこの感情偽装を獲得し、より効果的に用いることができるようになる。

Saarniら(1998)は、感情偽装を大きく2つに分類している。1つは前述した社会的コンセンサスを持ち、ルールとして定められているも

の、ディスプレイ・ルールに則った感情偽装であり、もう一つは社会的コンセンサスを持たず文脈依存的であり、「あざむき」的要素を多く含む感情偽装、「あざむき」の感情表出である。

発達の見地に立ち、子どもを対象にしたディスプレイ・ルールに基づく感情偽装研究は非常に多くなされており、その知識の獲得についての研究や(例えば Gnepp & Hess, 1986; Saarni, 1979), 実際場面での感情偽装研究(Cole, 1986; Josephes, 1994; Saarni, 1984)など様々である。また最近では「心の理論」研究との関連から特に幼児を対象にした研究もいくつかなされている(Banerjee, 1997; 澤田, 1997)。

一方、「あざむき」の感情表出についての研究は、どちらかと言えば具体的な「あざむき」場面においてどれだけ感情偽装を行い、他者をあざむくことができるかと言った、「あざむき」の感情表出の実際の能力に焦点を当てたものがほとんどである。

例を挙げると、Feldman, Jenkins & Popoola(1979)は、6歳・13歳・19歳を対象に甘いジュース・酸っぱいジュースと言った2種類のジュースを飲ませ、どちらの場合もおいしいジュースを飲んでいるかのように感情表出を制御・偽装するように求めた。大学生の評定者による虚偽検出を行ったところ6歳児は感情表出が虚偽のものであることが見分けられやすく、一方13歳・19歳は感情表出が虚偽のものであると悟らせにくいことが明らかになり、加齢とともに「あざむき」の感情表出の実行能力が向上することが示唆されている。また、Lewis, Stanger & Sullivan(1989)は3歳児を対象により自然な形

での「あざむき」場面を設定し、「あざむき」の感情表出の測定を行なっている。被験児は目の前に遊具の入った箱を呈示され、「決して覗かないように」と教示された。その後、実験者が退室して被験児の行動を隣室から観察し、被験児が教示を破って箱を覗いたのを確認して入室し、箱の中を覗いたかどうかを質問した。その時の感情表出反応をビデオに録画し言語的反応（覗いた・覗いてない）と対応させて分析を行った。その結果、3歳児も嘘をつく時において感情偽装を行い、他者をあざむくことができることを明らかにしている。

これらの研究は、子どもが嘘をつく時に感情表出からどれだけ虚偽性が漏洩しないように制御できるか、と言った具体的な行動統制に注目が向けられており、ディスプレイ・ルールによる感情偽装研究に見られるような感情表出についての認知・知識を扱った研究はほとんどなされていない。その大きな理由として考えられるのは、「あざむき」の感情表出として研究されているものが、その多くが嘘をつく時の表出であるという点である。自己の言動が嘘であることが悟られないように、表出から不安や動揺を漏洩しないように制御する能力は何歳頃から獲得されるのが問題になっており、感情表出は嘘の補助要因という視点である。しかし、「あざむき」の感情表出は嘘をつく時の感情表出だけではない。感情表出そのものが「あざむき」の主要な要素になっている場合も存在すると考えられる。例えば前述した「嘘泣き」は泣き顔、悲しみの表出をすることで他者に真実とは異なる「あざむき」の感情状態についての情報を流すものであり、嘘をつく時の表出とは異なり感情表出の持つ意味を他者を積極的にあざむくために用いている。この「あざむき」の感情表出は、いわば「あざむき」の手段・道具として感情表出であるといえる。子どもの持つ他者をあざむくための手段・方略としての感情表出の知識について探求していくことは、子どもの「あざむき」の感情表出、ひいては子どもの感情偽装について更なる知見が得られると思われる。

一方、「あざむき」の感情表出は他者を騙すと

いうことを目的としているため、「あざむき」(deception) 研究の一領域とみなすことが可能である。子どもにおける「あざむき」研究は、「心の理論」研究の一分野として様々な研究がなされて来ている (Peskin, 1992; Sodian, 1991)。例えば Sodian (1991) は、宝物隠しゲーム課題 (hide-and-seek task) を用いて4歳児が物理的対象の位置を他者からあざむくことが可能であることを指摘し、Peskin (1992) は好みや選択と言った自己の心的状態を他者から隠すことが可能であることを4歳児は理解していることを明らかにしている。

しかしながら、これらの研究において「あざむき」の手段として用いられている方法は指差しや足跡付けといった単純なものであり、それ以外の「あざむき」の手段に注目した研究はほとんど存在しない。例外は Sodian & Schneider (1990) の研究であり、彼らは幼児を対象に「あざむき」の手段として隠蔽する対象と関連する認知の手掛かり (例えばサッカー選手の人形とサッカーボールの看板) を操作することで、他者をあざむく課題を設定した。その結果、幼児は4歳から6歳にかけて加齢とともに認知的手掛かりを上手く利用して他者をあざむくことが可能になることを示唆している。

「あざむき」の手段・道具についての知識やその道具が他者の信念にどのように影響を与えるかについての認知を明らかにすることは幼児の「あざむき」理解をより知る上で必要であると思われる。「あざむき」の道具によってその理解の程度や、利用の仕方に大きな差が見られる可能性がある。そこで「あざむき」の手段として感情表出を何歳頃から、どのように理解し知識を獲得していくのか、について検討することは子どもの「あざむき」研究の知見を増やすためにも重要であると思われる。従って本研究においては、「あざむき」の感情表出の知識を他者をあざむく道具としての感情表出の知識とみなし、幼児におけるこの知識の獲得の発達の变化を明らかにすることを目的とする。また、感情表出を用いて他者をあざむくということがどのような効果を他者に与えるのかについて、幼児がど

のように認知しているのかを明らかにすることは、幼児の「あざむき」の感情表出の知識をより詳細に知るために重要であると思われる。そこで、本研究においては幼児の「あざむき」の感情表出が他者の信念に与える効果の認知を探ることを目的の一つとする。

方 法

被験者

千葉県内の私立幼稚園の年少児（3歳6ヶ月～4歳5ヶ月：平均4歳0ヶ月）・年中児（4歳8ヶ月～5歳3ヶ月：平均5歳0ヶ月）・年長児（5歳6ヶ月～6歳5ヶ月：平均5歳11ヶ月）、計63名（年少児22名、年中児21名、年長児21名）を対象とした。

課題内容

主人公が利益を獲得し不利益を避けるためには、感情表出を偽り他者をあざむかなければならないストーリー課題を作成した。ストーリーの内容はFeldmanら（1979）の研究を参考に、自分の好きな食物を多く食べるためには「好きな食物を食べる場面」においてネガティブな感情表出を示し、「嫌いな食物を食べる場面」においてポジティブな感情表出をすることで他者をあざむく必要がある仮想場面を設定した。課題刺激として、A3判の画用紙に黒の線描画を彩色した6枚の図版、及びそれぞれポジティブ、ネガティブ、ニュートラルな感情表出を表す円状の感情表出カード3枚を用意した。被験児の性別を考慮し、主人公が男児の図版と女児の図版の2種類を作成した。具体的なストーリー課題の内容はTable 1に示した。

手続き

対面面接による仮想場面実験を行なった。予め感情表出カードによる表出理解の確認を行い、図版を紙芝居形式で呈示しストーリー課題の内容を教示した。その後『どのお顔をすればお婆さんに嘘がつけるかな、騙せるかな』と質問し、主人公の感情表出を被験児に選択させ、さらに『このお顔を見てお婆さんは太郎君（花子ちゃん）はどっちのカレーが好きだと思ったかな。

お肉のカレーかな、ニンジンのカレーかな』と質問して「あざむき」の対象の信念を推測させた。

結 果

感情表出カードの選択が行なうことができなかった年少児2名を省き、計61名を分析の対象とした。

「あざむき」感情表出の選択

主人公の「好きな食物を食べる場面」の感情表出選択及び「嫌いな食物を食べる場面」の感情表出選択についてそれぞれ感情表出選択（ポジティブ・ネガティブ・ニュートラル）と年齢群（年少・年中・年長）の3×3のFisherの直接確率検定を行なった結果、「好きなものを食べる場面」・「嫌いなものを食べる場面」いずれにおいても有意差は見られなかった。また「あざむき」の感情表出選択（好きな食物に対してネガティブな表出、又はニュートラルな表出を選択し、嫌いな食物に対してポジティブな表出、又はニュートラルな表出を選択。あるいは両方においてニュートラルの表出を選択）について、選択に成功した者・失敗した者に分類して年齢との2×3のFisherの直接確率検定を行なったところ有意差は見られなかった。そこで効果的な「あざむき」を行なえる感情表出（好きな食物に対してネガティブな感情表出を選択し、嫌いな食物に対してポジティブな感情表出を選択する。）の選択に成功した者・失敗した者に分類して（Table 2）年齢群との2×3のFisherの直接確率検定を行なったところ有意傾向が見られた（ $p=0.085$ 、両側検定）。下位検定として、各年齢群毎に表出選択成功・失敗についてのFisherの直接確率検定を行ったところ、年少児群及び年中児群に有意差が見られた（ $P=.000$ 、両側検定； $P=.007$ 、両側検定）。「あざむき」の感情表出が「あざむき」の対象の信念に与える効果の推測

「あざむき」のために選択された感情表出が「あざむき」の対象の信念に与える効果の推測に

Table 1 ストーリー課題の内容

【男の子(女の子)と母親の並んでいる図版1を提示】
 今日、太郎君(花子ちゃん)のお母さんはお仕事で、遅くまでお出かけをしなければなりません。

【母親とお婆さんが並んでいる図版2を提示】
 なので、お母さんは太郎君(花子ちゃん)の晩御飯をお隣のお婆さんに作ってもらうようお願いしました。でも、このお婆さんはとても意地悪なお婆さんで、太郎君(花子ちゃん)の嫌いな物を一杯食べさせようとしています。

【再び、男の子(女の子)と母親の並んでいる図版1を提示】
 太郎君(花子ちゃん)は、お肉のカレーが大好きでニンジンのカレーが大嫌いな男の子(女の子)です。

【お婆さんが2つの鍋にカレーを作っている図版3を提示】
 お婆さんは、太郎君(花子ちゃん)の嫌いなものを入れたカレーを作ろうとしています。お婆さんは太郎君(花子ちゃん)の好き・嫌いが分からないので2つのカレーを作って、太郎君(花子ちゃん)に味見してもらうことにしました。一つは、太郎君(花子ちゃん)が好きなお肉のカレーで、もう一つは太郎君(花子ちゃん)の嫌いなニンジンのカレーでした。

【男の子(女の子)の前にお肉、ニンジンの2つのカレーが置かれ、お婆さんがその様子を見ている図版4を提示】
 お婆さんは、太郎君の味見する時のお顔を見て、太郎君(花子ちゃん)の嫌いな方のカレーを晩御飯に出そうとしています。太郎君(花子ちゃん)は、自分の好きなカレーを食べたいと思っています。そのためにはお婆さんを騙さないといけません。

【それぞれ、男の子(女の子)の表情が白抜きになっている、お肉のカレー、ニンジンのカレーを食べている図版5、図版6及び3枚の感情表出カードを提示】
 この3つのお顔のうち、太郎君(花子ちゃん)はお肉入りのカレーを食べる時にはどのお顔ををして、ニンジン入りのカレーを食べる時にはどのお顔をすればお婆さんに嘘がつけるかな、お婆さん騙せるかな。

Table 2 効果的な「あざむき」の感情表出選択の成績

	選択成功	選択失敗	合計
年少児	2(10.0%)	18(90.0%)	20
年中児	4(19.0%)	17(81.0%)	21
年長児	8(40.0%)	12(60.0%)	20

Table 3 効果的な「あざむき」の感情表出選択と「あざむき」の対象の信念推測間の論理的-一貫性の有無

	「あざむき」の感情表出選択成功			「あざむき」の感情表出選択失敗			合計
	年少児	年中児	年長児	年少児	年中児	年長児	
一貫性有(人)	1	3	7	15	13	10	49
一貫性無(人)	1	1	1	3	4	2	12
合計(人)	2	4	8	18	17	12	61
一貫性率	50%	75%	87.5%	83.3%	76.5%	83.3%	80.3%

ついて、選択された表出と推測された「あざむき」の対象の信念間の論理的一貫性の有無から分析を行った (Table 3)。具体的には、効果的な「あざむき」の感情表出を選択成功した者が、「あざむき」の対象が「あざむき」手の感情表出によってあざむかれ、事実とは異なる信念を抱いたと推測した場合、つまり「お婆さんは、太郎君・(花子ちゃん)が【ニンジン】のカレーが好きと思っている」と答えた場合に表出選択と「あざむき」の対象の信念推測は論理的に一貫しているとした。逆に効果的な「あざむき」の感情表出選択に失敗した者では「あざむき」の対象が「あざむき」手の感情表出によってはあざむかれず、事実と同じ信念を抱いたと推測した場合、つまり「お婆さんは、太郎君・(花子ちゃん)が【お肉】のカレーが好きと思っている」と答えた場合、表出選択と「あざむき」の対象の信念推測は論理的に一貫しているとした。また、それぞれ逆の回答をした場合は表出選択と「あざむき」の対象の信念推測の間には論理的一貫性がないとした。ここでは、論理的一貫性がある場合を、感情表出が「あざむき」の対象の信念に与える効果正しく理解しているとした。表出選択と「あざむき」の対象の信念間の論理的一貫性率について Freeman & Tukey の逆正弦変換法による二要因分散分析 (年齢群×表出選択成功・失敗)を行った。その結果、年齢群及び表出選択成功・失敗いずれの条件においても有意差は見られなかった。そこで表出選択と「あざむき」の対象の信念間の論理的一貫性の有無について 1×2 の Fisher の直接確率検定を行なったところ、有意差が見られた (P=.000, 両側検定)。

考 察

各場面における表出選択の年齢による偏りは見られなかったが、効果的な「あざむき」の感情表出選択においては有意傾向が見られ、年少児と年中児は効果的な「あざむき」の感情表出選択を行なったものが明らかに少なく、年長児においては選択において差が見られなかった。

このことから、加齢とともに「あざむき」のための感情表出の理解ができるようになる可能性があることが示唆された。しかしながら、効果的な「あざむき」の感情表出選択において一応の有意傾向は見られたが、全体として「あざむき」の感情表出を選択することができた者は被験児の20%程度に過ぎなかった。これは、「あざむき」の感情表出が幼児にとって理解することが困難であるというのではなく、むしろ本研究で用いられたストーリーそのものを理解することの困難性が原因であると考えられる。ストーリーの難解度を上げている原因として考えられるのは、ストーリーの冗長さが考えられる。絵画図版を用いて補助しているとはいえ、幼児にはストーリーが長すぎて記憶を始めとする情報処理能力の限界を超えてしまった可能性がある。

また、ニュートラル表出の存在が、全体的な結果を曖昧にしてしまった傾向が見られる。ニュートラル表出を含んだ「あざむき」の感情表出選択において、年齢差が見られなかった理由は、ニュートラル表出の意味合いの理解の年齢による程度の違いが考えられる。年長児におけるニュートラル表出の意味と、年少児における意味が異なっている可能性が挙げられる。ニュートラル表出が、年少児においては他の表出の代替表出・類似表出として扱われ、「情報を他者に呈示しない」というニュートラル表出本来の意味が失われている可能性が考えられる。そのため、「あざむき」の感情表出としてニュートラル表出が選択されているのかが曖昧になっていると考えられる。

選択された感情表出が「あざむき」の対象の信念に与える効果の幼児の認知を検討したところ、年齢及び表出選択の成功・失敗に関わらず全体的に論理的一貫性が高かった。このことからこの年齢の幼児においては「あざむき」の有無に関わらず、感情表出が他者の信念に与える効果を推測することがある程度可能になっていることが示唆された。しかしながら、本研究においては効果的な「あざむき」の感情表出選択者が全体的に少ない。また、その基準も

ニュートラル表出の有効性を除外し、さらに部分成功者も表出選択失敗者として分類していることから、「あざむき」の感情表出選択失敗者の選択表出と「あざむき」の対象の信念間の論理的な一貫性の有無については厳密性に欠ける点があると考えられる。

本研究は幼児の「あざむき」の感情表出の理解の発達の变化を一部明らかにしたが、全体としてストーリー課題の困難さが目立った。今後の課題としては、ストーリー課題の修正を行い、幼児の情報処理能力により適したストーリー課題を用いての「あざむき」の感情表出の理解及び、「あざむき」の感情表出が他者の信念に与える効果について再検討を行う必要があると考えられる。

引用文献

- Banerjee, M. 1997 Hidden Emotion: Preschoolers knowledge of appearance-reality and display rules. *Social Cognition*, 15, 107-132.
- Cole, P. M. 1986 Children's Spontaneous expressive control of facial expression. *Child Development*, 57, 1309-1321
- Feldman, R. S., Jenkins, L., & Popoola, O. 1979 Detecting of deception in adult and children via facial expression. *Child Development*, 50, 350-355.
- Gnepp, J. & Hess, D. L. R. 1986 Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, 22, 103-108.
- Josephes, I 1994 Display rule behavior and understanding in preschool children. *Journal of Nonverbal Behavior*, 18, 301-326
- Lewis, M., Stanger, C., & Sullivan, M. 1989 Deception in three years olds. *Developmental Psychology*, 25, 469-443.
- Peskin, J 1992 "Ruse and representation: On children's ability to conceal information". *Developmental Psychology*, 28, 84-89.
- Saarni, C. 1979 Children's understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*, 15, 424-429.
- Saarni, C. 1984 Observing of children's use of display rules: Age and sex differences. *Child Development*, 55, 1504-1513.
- Saarni, C. Mumme, D. L. & Campos, J. J. 1998 Emotional development: Action, Communication, and understanding. In W. Damon & N. Eisenberg (Eds) *Handbook of Child Psychology Fifth ed. Vol 3: Social, Emotional, and Personality Development*. (pp. 237-310). John Wiley & Sons, Inc.
- 澤田忠幸 1997 幼児期における他者の見かけの感情の理解の発達 教育心理学研究, 45, 416-425.
- Sodian, B. 1991 The development of deception in young children. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, 173-188.
- Sodian, B. & Schneider, W. 1990 Children's understanding of cognitive cuing: How to manipulate cues to fool a competitor. *Child Development*, 61, 697-704.